



TITLE:

骨, 関節結核発生頻度の変遷(臨床)

AUTHOR(S):

小川, 正三; 大柳, 裕

---

CITATION:

小川, 正三 ...[et al]. 骨, 関節結核発生頻度の変遷(臨床). 日本外科宝函  
1957, 26(4): 547-552

ISSUE DATE:

1957-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206390>

RIGHT:

## 臨 床

# 骨、関節結核発生頻度の変遷

慶応義塾大学医学部整形外科教室（主任：岩原寅猪教授）

小 川 正 三 ・ 大 柳 裕

〔原稿受付 昭和32年4月1日〕

## THE TRENDS IN INCIPIENCE-AGE OF BONE-AND-JOINT-TUBERCULOSIS PATIENTS

by

SHOZO OGAWA and HIROSHI OYANAGI

From the Department of Orthopedic Surgery, School of Medicine, Keio Gijuku University  
(Director : Prof. Dr. TORAI IWAHARA)

There were 5,226 bone-and-joint-tuberculosis day-patients at the Orthopedic Clinic of the Keio University Hospital during the period from 1929 to 1955. This amounted to 6.1% of the total 85,127 day-patients during the same period. Of the 5,226 cases, exceptions were made of those diagnosed as having occurred several years before, and a study was made on the remaining 4,073 cases to determine the frequency of the outbreak of the disease.

1. The incidence of the disease reached its height in 1929; i. e., 10.6% of the total day-patients, and declined to 4.5% in 1943. It then again revealed an upward trend, reaching 7.8% in 1946, but it has since shown a continual downward trend. There was a marked decrease especially after 1950, dropping to 0.9% in 1955.

2. Classified according to the parts of the body, the cases in the vertebral column amount to 70%; hip joint, 10.3%; knee joint, 6.8%; ankle joint, 4.7%; shoulder joint, 1.6%; elbow joint, 1.5%; wrist joint, 1.5%; others, 3.8%. Furthermore, in each classification there has been a remarkably decreasing trend in the number of cases since 1950.

3. When comparison is made between adult and child in connection with the decrease in the number of cases, no remarkable difference can be noted. In the case of pulmonary tuberculosis, there is noted no decline in morbidity in spite of the decline in mortality. It is interesting, therefore, to observe that the bone-and-joint tuberculosis, in contrast to pulmonary tuberculosis, has decreased remarkably during the past several years.

### い と ぐ ち

時代の変転と共に疾患の様相もまた変貌する。嘗て

は業病といわれ医療の術を知らなかつた疾患で、現在では殆んど診察の機会さえ得られないものが数少くない。同様に現今治療対象として常に吾々の脳裡を離れ

ない疾患も、何時の日にか歴史的な疾患として語られる時が来るものと思われる。結核は人類の上に幾多の悲劇をもたらし、今日に於ても尚その対策に悩まされている疾患であるが、既に Maurer (1955)の如く「肺結核に於ては抗生物質により臨床の時代から想像の時代が来る」と極言しているものもある。吾々の整形外科領域でも、頻度の点に於ても、難治性の点に於ても長年代表的疾患として君臨していた骨関節結核は、近年に至つて漸く衰退の徴が覗われて来た事は、此処数年米日常の臨床に痛感されるところである。

吾々は慶大整形外科の最近27年間の骨関節結核を、その発生頻度の変遷の上から調査検討してみることとする。

第1表 外来患者に対する骨関節結核患者数の比

	外来患者数	骨関節結核患者数	%
昭 4	2273	241	10.6
5	2462	228	9.2
6	2321	150	6.5
7	2347	211	9.0
8	2338	174	7.5
9	2259	131	5.8
10	2402	149	6.2
11	2466	135	5.5
12	2556	127	5.0
13	3098	184	6.0
14	3362	186	5.5
15	3625	162	4.5
16	3853	177	4.6
17			
18	4475	201	4.5
19	3839	196	5.1
20	1817	136	7.5
21	1619	126	7.8
22	1934	116	6.0
23	2339	158	6.8
24	3120	182	5.7
25	3693	154	4.2
26	4134	150	3.6
27	4984	130	2.6
28	5433	115	2.2
29	5856	100	1.7
30	6522	60	0.9
計	85127	4073	4.8

調 査 対 象

昭和4年より昭和30年に至る27年間に当科外来を訪れた骨関節結核患者は、戦災で病床日誌の焼失した昭和17年を除くと実数5226例で、これは此の間に於ける外来患者総数85127例に対し平均6.1%に当る。患者発生数の推移を正確に把握するためには陳旧例を除外する必要があり、病歴並に現症より陳旧例と思われるものを除外した残りの4073例を調査の対象とした。

骨関節結核の年度別発生頻度 (第1表, 第1図)

骨関節結核4073例は外来患者総数の4.8%に当るが、外来患者数に対する比率を年度別にみると、昭和4年の10.6%を最高とし、その年々に多少の変動を示しながら昭和18年の4.5%まで減少の傾向を辿るが、昭和19年より再び増加し始め、昭和21年には7.8%まで達し、之を境として以後下降線を描き、昭和25年に至りそれ迄の最低値である4.2%となり、以後は更に急激に減少して昭和30年には実に0.9%となり、昭和初期に較べると大略十分の一に減少している。

罹患部位別の発生頻度

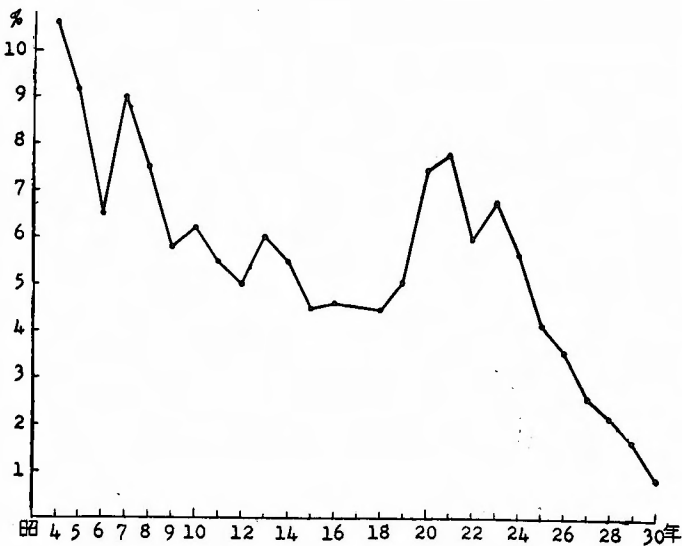
骨関節結核4073例中男は2185例、女は1888例で、男女の比は1.2対1で男に多い。之を罹患部位別に分けると脊椎カリエス2839例 (70.0%)、股関節結核420例 (10.3%)、膝関節結核279例 (6.8%)、足関節結核192例 (4.7%)、肩関節結核66例 (1.6%)、肘関節結核63例 (1.5%)、手関節結核61例 (1.5%)、その他153例 (3.8%)であり、その他の中では仙腸関節結核45例、風棘44例、大転子結核23例、骨盤結核18例、胸骨結核9例等が主なものとして挙げられる。

a. 脊椎カリエス (第2, 3図)

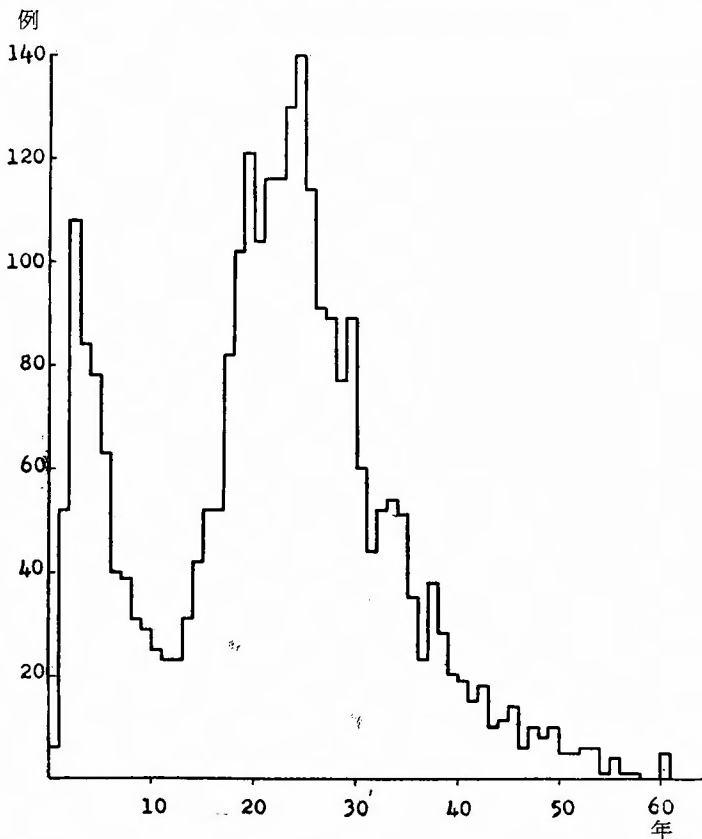
脊椎カリエスは骨関節結核の実に70%を占め、幼小児期並に青年期に好発する。脊椎カリエスの年度別発生頻度を見るに、昭和4年の7.5%を最高とし、昭和6年以後は4乃至5%を上下しながら減少し、昭和15年より19年までは3%強となるが、戦後は再び4乃至5%に増加した後、昭和25年以降急激に減少し、先に述べた全骨関節結核の発生頻度と全く軌を一にしている。

b. 股関節結核 (第4, 5図)

股関節結核は骨関節結核の10.3%で、関節結核の主位に位する。5才以下の幼児に好発し、年令の長すると共に急激に減少する。股関節結核の年度別発生頻度は第5図にて一目瞭然の如く骨関節結核のそれと同様の経過を辿っている。



第1図 骨関節結核の年度別発生頻度



第2図 脊椎カリエスの発病年齢 (2839例)

合1451例  
男1388例

たゞ昭和28年以後の発生頻度には減少が見られず、1.5乃至2%, 即年間にして10名程度の患者発生をみている。

#### c. 膝関節結核 (第6, 7 図)

膝関節結核は骨関節結核の6.8%で、股関節結核に次ぐ。幼小児に比較的に好発するが青壮年期の発生も相当に多い。症例数が少ないため年度別発生頻度を正確に知る事は難しいが、略骨関節結核の場合と同様の傾向を示し、此处数年の減少も亦著しい。

#### d. 足関節結核 (第8, 9 図)

足関節結核は骨関節結核の4.7%で、関節結核中第3位である。幼小児に僅かに多いが、30才までは略各年代に同率に発生する。膝関節結核より更に少ないため、年度別発生頻度は極めて不規則であるが、矢張昭和25年以降の減少が目立つ。

#### e. 肩, 肘, 手関節結核 (第10 図)

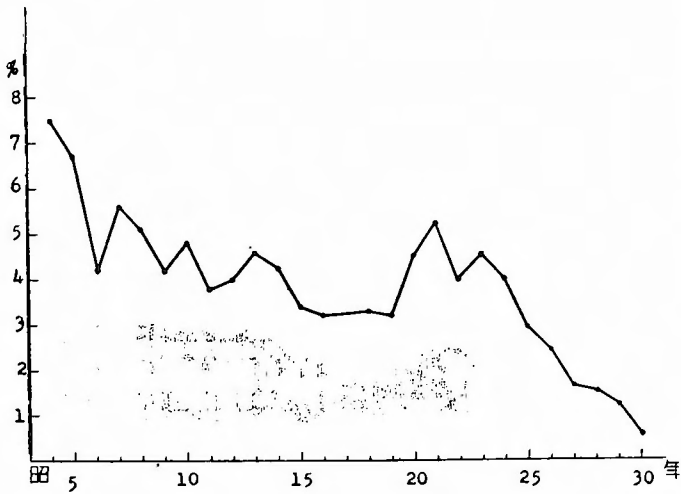
三者共幼小児よりむしろ青年期に好発する。夫々年間発生数が2, 3例に過ぎぬため、発生頻度の推移を知る事は出来ない。

#### f. その他

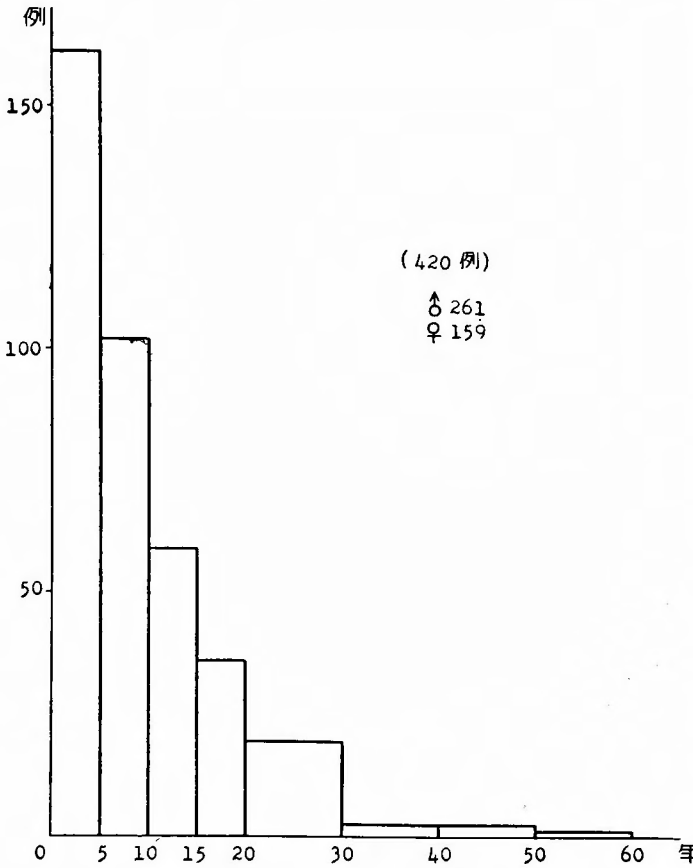
その他の骨関節結核は、個々の統計をとり得る程の症例数に充たない。

### 小児と成人との間における発生頻度の変遷

患者発生の著明な減少を示し始めた昭和25年を境とし、昭和4年より24年までの患者発生率と、昭和25年より30年までの患者発生率とを小児と成人別に比較した。三木・猪狩の研究を参考として10才未満を小児、11才以上を成人として取扱った。昭和24年以前における小児の骨関節結核患者は外来患者1000に対し平均19となり、25年以後においては平均8である。即小児においては昭和24年



第3図 脊椎カリエスの年度別発生頻度

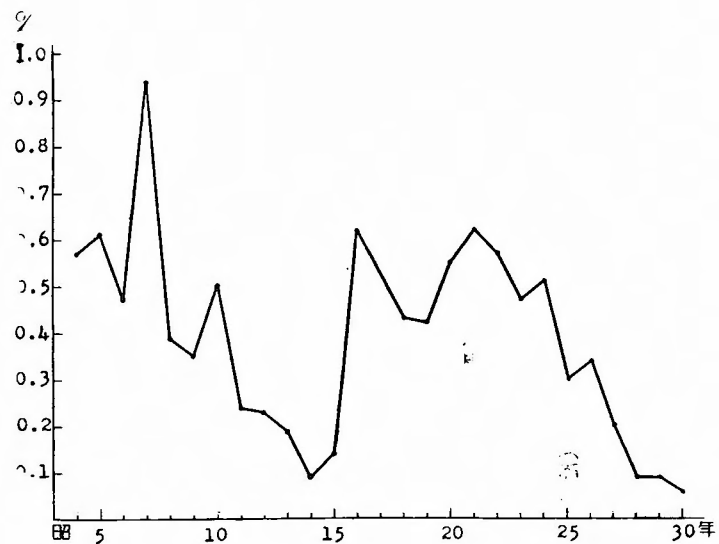


第4図 股関節結核の発病年令

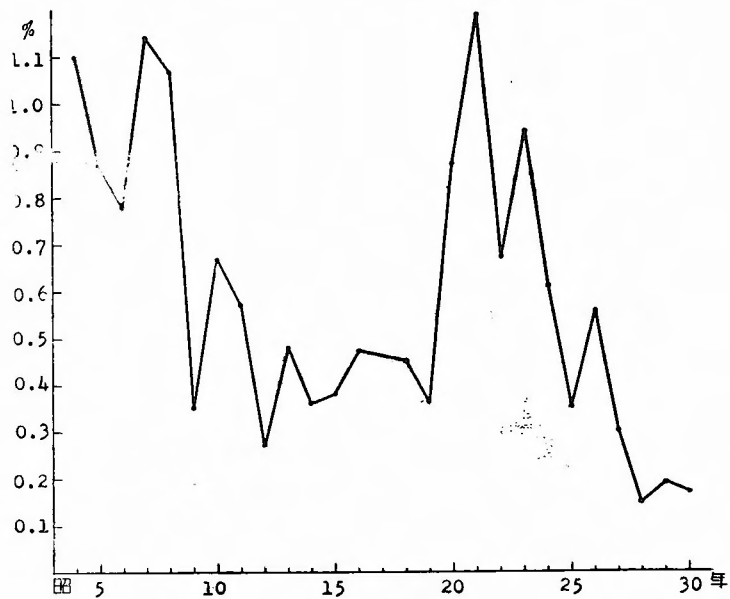
以前と25年以後では外来患者に対する骨関節結核患者数が42%に減少している。一方成人では昭和24年以前は外来患者1000に対し平均48であるが、25年以後は平均18であり38%に減少している。即小児、成人共に著しく減少しており、小児と成人の間における減少の程度に有意の差は認められない。

考 按

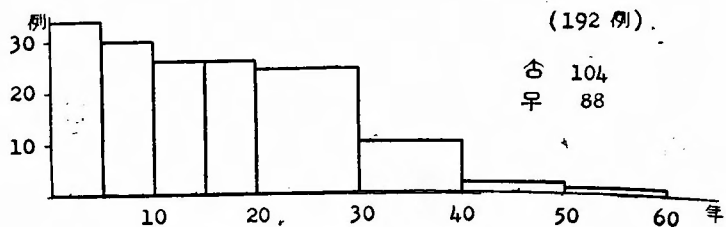
結核死亡率の減少については此処数年来極めて顕著であり、之に関する報告も田中(1954), Drolet(1955)を始め枚挙にいとまがない。然しDrolet は患者発生の減少は死亡率の減少に伴わずと云い、田中、Simmonds (1953) 等は患者発生率は此処数年来不変であると云い、死亡率の減少と相俟つて患者数の増加が問題となつてきている。死亡率の調査が比較的容易且正確であるのに反し、罹患率はその調査方法並に判定基準の不確実性から正確を期し難いのは止むを得ないが、何れにしても患者数に著明な減少が見られないのは事実である。骨関節結核は第二次結核症として肺外結核の主位を占めているが、骨関節結核が斯くも減少し、30年度には実に外来患者の1%にも充たなくなつた事は瞠目すべき事実であり、骨関節結核と同様血行性撒布によつて起ると考えられているその他の大部分の肺外結核症も著明に減少していることを推測させる。吾々の渉獵した範囲では之を具体的に取上げている報告は見当らず、整形外科領域では岩切らが九大整形外科外来における骨関節結核患者の減少に言及しているに過ぎない。凡そ結核は国別の差異は勿論、都会と田舎でもその様態に差があり、各種調査の集積を俟つて最終の結論を下すべきものであるが、本統計に於て骨関



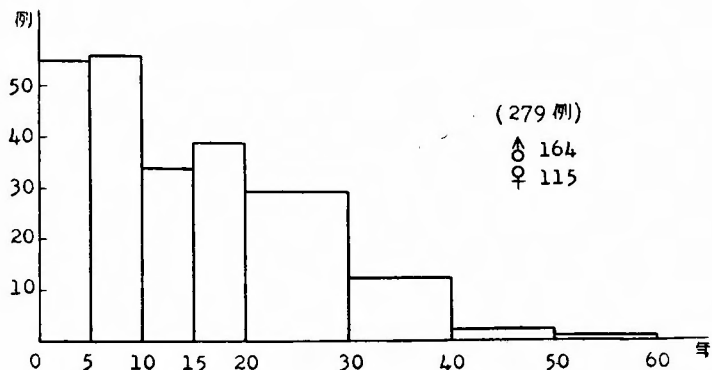
第7図 膝関節結核の年度別発生頻度



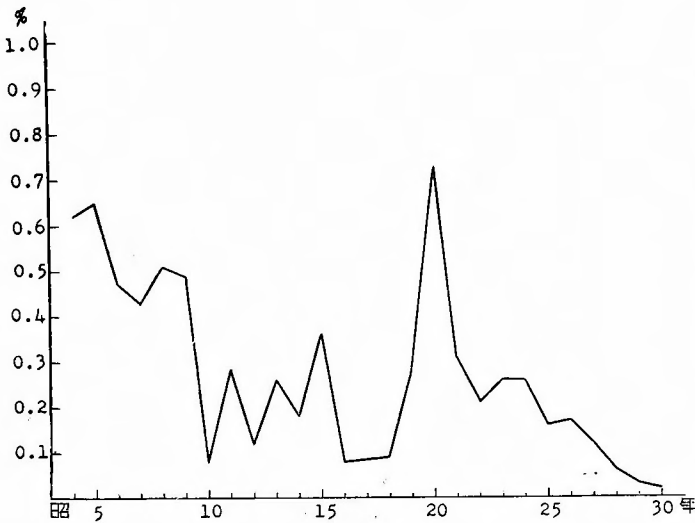
第5図 股関節結核の年度別発生頻度



第8図 足関節結核の発病年令



第6図 膝関節結核の発病年令



第9図 足関節結核の年度別発生頻度

### 肩関節

(66例)

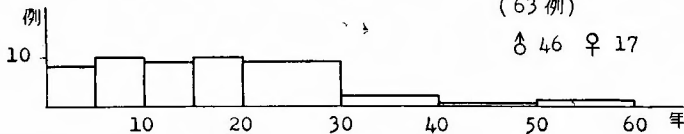
♂ 41 ♀ 25



### 肘関節

(63例)

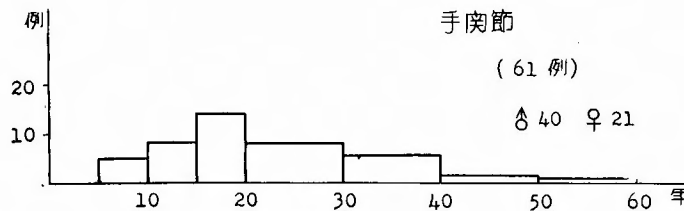
♂ 46 ♀ 17



### 手関節

(61例)

♂ 40 ♀ 21



第10図 肩, 肘, 手関節結核の発病年齢

節結核の発生が脊椎カリエスを始め凡ての骨関節結核に著明に減少しつつある事が証明されたのは、誠に意義深く慶ばしい事ということが出来る。

永井 (1956) は昭和23年と31年とにおける骨関節結核の発病年齢を調査し、前者に於ては25才を頂点とした発生頻度を示し、後者に於ては5乃至9才を頂点とし、幼児の発病が相対的に増加した事を示し、岩切らも年齢的に近年になる程年少者の罹患率が高い事を報告している。吾々の昭和25年を境とした小児と成人別の患者発生率の減少率の調査では、両者に有意の差が認められない。

### む す び

昭和4年より30年に至る慶大整形外科外来の骨関節結核患者につきその発生頻度の変遷を調査検討し、次の結果を得た。

- 1) 骨関節結核患者の発生頻度は昭和25年以降急激に減少し、昭和30年には外来患者の0.9%にまで減少した。
- 2) 罹患部位別にみても等しく患者発生率の減少が見られる。
- 3) 小児の骨関節結核の減少率と成人のそれとの間に有意の差は認め難い。

(本論文の要旨は昭和31年11月、第36回慶応医学会総会にて演述した)

### 文 献

- 1) Drolet, G.: Amer. Rev. of Tuberc., 72; 419, 1955.
- 2) 岩切 整形外科と災害外科, 6; 112, 昭31.
- 3) 三木: 日本臨床結核, 73; 102, 昭23.
- 4) Maurer, A.: Presse Méd., 64; 38, 1956.
- 5) 永井: 整形外科と災害外科, 6; 1, 昭31.
- 6) 小川: 臨外, 11; 671, 昭31.
- 7) Simmonds: 結核抄速, 5; 253, 昭29.